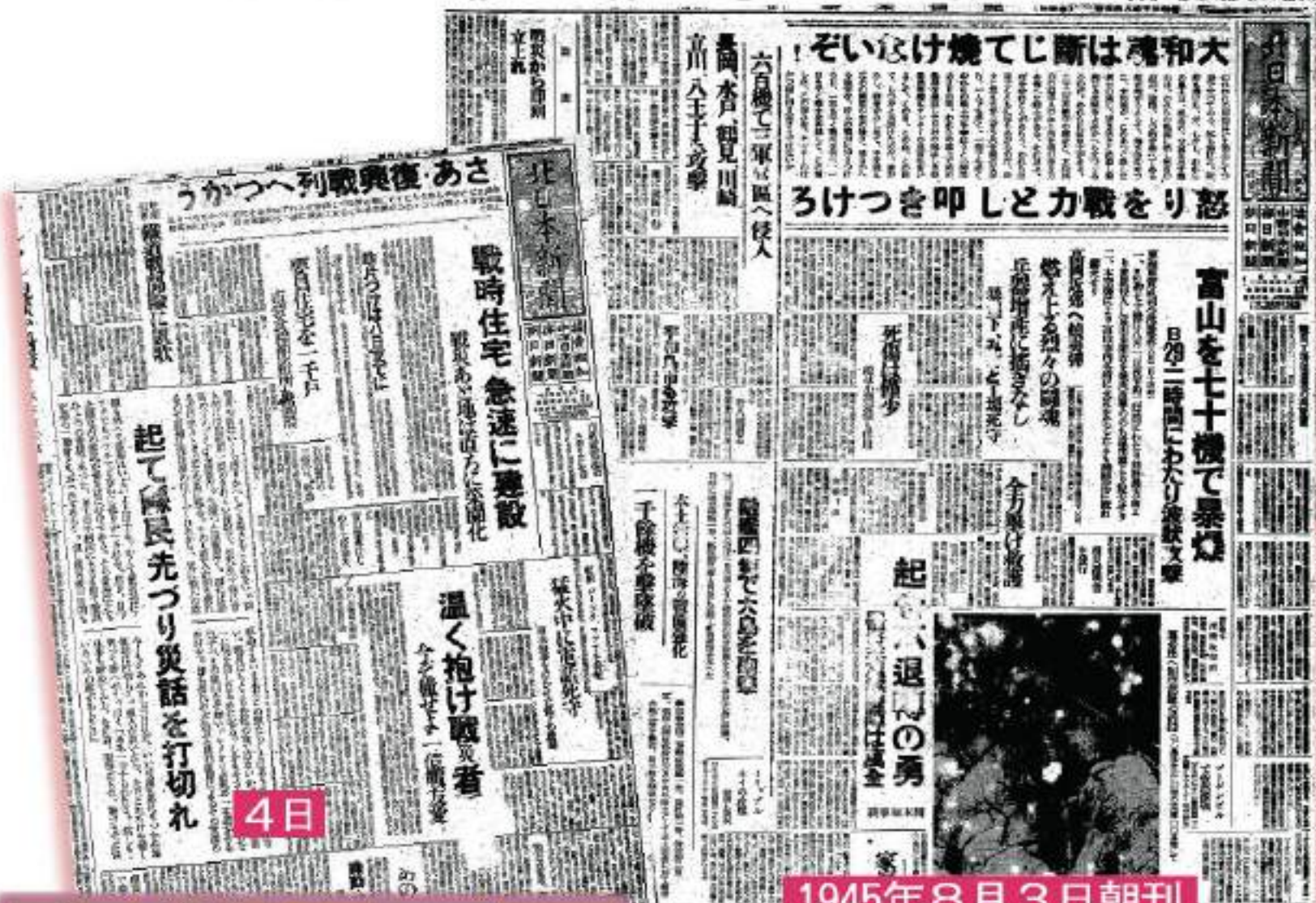
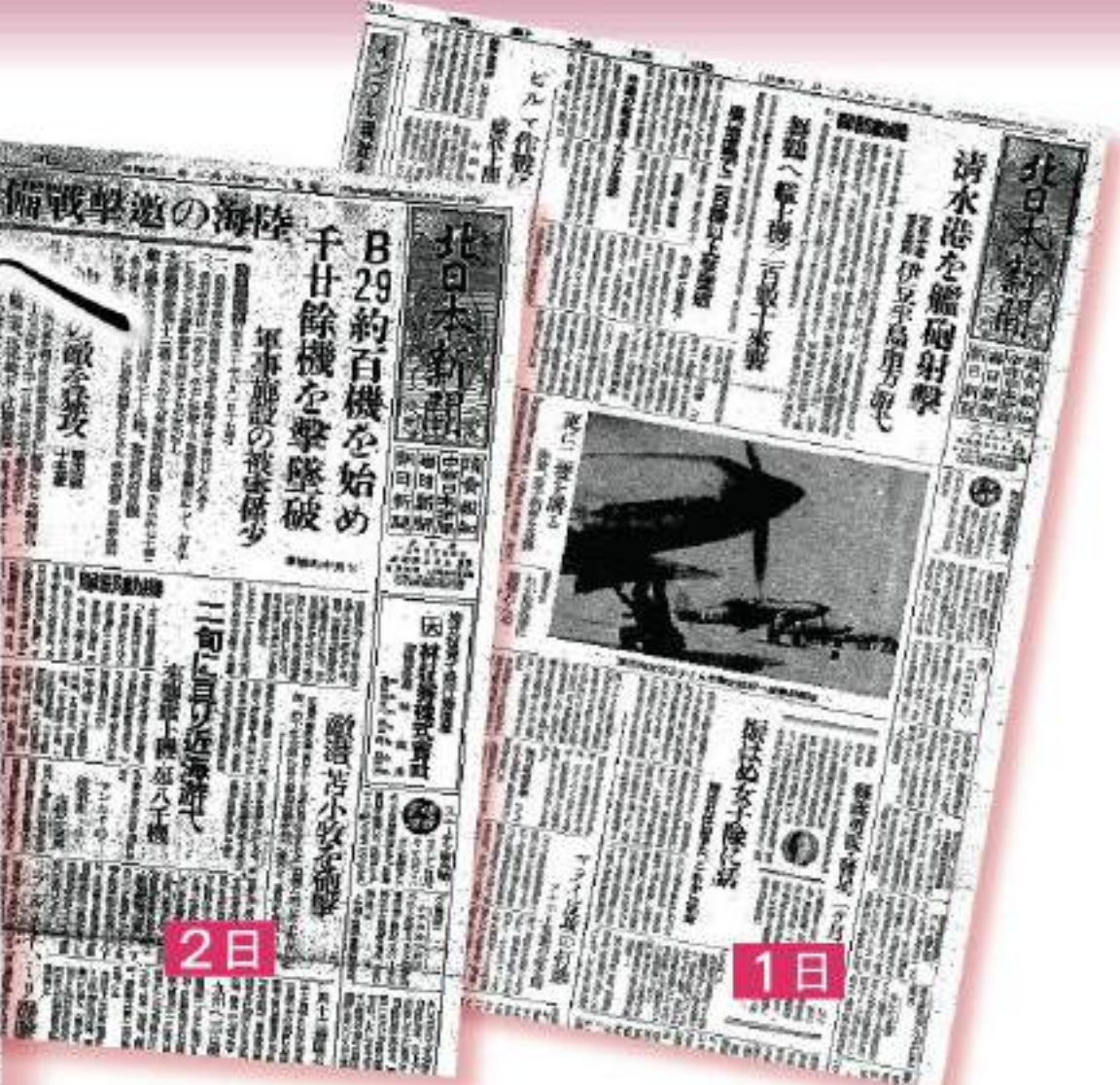




時代刻み 未来へ



1945年8月3日朝刊



1日

2日

戦争の記憶つなぐ

新聞は、時代を記録する。例えば70年前の8月の北日本新聞。1日のコラムは富山駅のエピソードを取り上げた。戦災に遭った東京や大阪からの乗客のため、駅員がひしゃくで飲み水を配って回ったという。「ノドだけでは無く心まで溶けてほぐれる文字通りのウルホビであった」

太平洋戦争末期の息も詰まるような空の下、いたわり合う人々の暮らしがあった。その上に、爆弾雨が降り注いだ。翌2日未明の富山大空襲。一夜にして市街は焼け野原に変わった。

記者たちはすぐにペンを取った。

3日の紙面は怒りと嘆きに満ちていた。トップ記事の見出しは「大和魂は断じて焼けないぞ」。コラムは新聞社が焼失しても、輸転機を移してあった新川村寺田(現立山町寺田)で新聞製作を続けたいことを伝え、県民に人や物の疎開を促した。

新聞は、記憶を掘り起こす。1971(昭和46)年、夕刊で連載富山大空襲「を偲同にわたって続けた。読者の体験談や資料を基に大空襲をドキュメントとして再現。書籍化の際には埋もれていた被災者名簿も掲載し、多くの遺族や市民らが手に取った。

戦後50年を迎えた95(平成7)年には県などと「戦時下の暮らし展」を開き、千人針や慰問袋など苦難の時代を物語る400点を展示。体験記も出版した。2005(平成17)年は「戦後遺言」と題し、高齢化の進む戦世代の声を届けた。

そして、戦後70年。きょう1日、本紙は創刊記念日を迎えた。連載「あの日の空」では、戦前戦中の時代の空気を追い掛けている。戦争の真実を胸に刻み、平和な明日への歩みを続けるために。



6月27日～7月7日に開かれた「あの日の空」のフニネート記事展＝高岡市民会館



戦時下の北日本新聞を使って富山大空襲について学ぶ児童ら＝6月12日、富山市の富山大附属小学校

1945年8月1日～4日の朝刊1面はwebunで見ることができます。



左から『富山大空襲』(1971年刊)、『私の戦争体験記』(95年刊)、『戦時下の暮らし展』(2005年刊)